

# 森立之の生涯 7 帰藩～幕末 2

## その業績について

森立之(1807～1885)

前回は、去年十一月だったので、新型コロナ禍を避けて四ヶ月目の講座となります。前回は、森立之の学業が最も充実していた、帰藩後～幕末までの足取りを見ました。その前には遊相時代の臨床例を見たが、この裏で立之は正名学・文字・音韻・訓古についての学問。いわゆる小学に詳細に取り組んでいたとも知りました。この正名学を究める事によつて、素問や傷寒論に使われている語彙が、元来どのような意味で使われていたかを、立之は跡付けたわけです。

少し視点をずらせて親友であり同僚である澁江抽齋のやつていることを見ると、やはり中国の典籍が、本来どのような読み方をしていたかを、小学の立場から明らかにしようとしています。これについては、「澁江抽齋墓碣銘を読む」というような内容で、いづれ話をしようと思います)

ならば、この江戸の終り頃から、なぜこのような小学回帰が起つたのかという問題が出てきます。そこで二人の師としてあげられる人に狩谷樵斎という人物に注目することになります。しかし小学回帰は樵斎ひとりの起した波でもない。

もつと大きな背景として幕府の御用学問である林家・昌平齋の学問に対する反発があつたのではないかと思うのです。幕府の採用していた学問とは、朱子学といふことになっていきますが、全くの朱子学という訳でもなく、林羅山(1583～1657)の打ち建てた学問でした。羅山は「宇宙の原理である理は、人間関係では身分として現れる」として上下定分の理を説いて士農工商の身分制度を正当化しました※。

たとえば儒教には「親には孝、君には忠」といふ題目がありますが、考えてみれば「君には忠」ほど武士社会に都合のよい道徳はありません。武士の頂点に徳川幕府があり、その幕府と將軍に絶対的な忠をしめすが武士の規範だといふことになるのだがら当然です。

朱子学自体の教理はこれほど単純なものではありませんが、林羅山が徳川家康のグレスとして幕府に招かれ、その学問が敷衍されて二百年以上も経つと、その教理が硬直してしまつている。そこで、儒教の古来の姿を、もう一度見返してみようとした時、

人々の目から鱗が落ちたのではないか。

先に引いた「親には孝、君には忠」の原点も、「身体髮膚、之を父母に受く。敬えて  
先んじて  
毀傷せざるは、孝の始めなり。身を立て道を行い、名を後世に揚げ、以て  
父母を  
敬ふは、孝の終りなり」(孝経)というような内容で、単純に父母を大  
事にしようという素朴な道徳にすぎない。

二に氣づいた小学回帰派は、林家の学問を通さない目で、再度、原典を読んでみよ  
うと考えたのだと思われまふ。その結果、古学といふことはが生まれた。古学で大切  
にするのは「漢唐の注」つまり、唐以前に注のほどこされた典籍で、そこには明代に  
まれた朱子学の色がまだ入っていないわけだ。狩谷棹斎の蕪陶をうけた二人は、素  
問・靈樞・傷寒論も古学を学ぶ目で読むことになりました。

三からは森立之ひとりの話になりますが、錢超塵(北京中医薬大学)が「素問攷注解  
説」に書いているように、立之も「素問攷注」の中で、大素(隋代の医書で、素問から  
条文を多数引いている)との校勘を行なっています。それも必要な例を示すなど、最小  
限に行なっているのではなく、全面的に行なっている。それだけ漢唐の注を大事にしよ  
うとしていたかの表れだと書えるでしょう。

森立之は「素問」を校勘攷注すると同時に、「太素」の原文および楊上善注を全部  
引用し、原文と楊注についてもまた校勘訓詁を加えた。つまり「素問攷注」は「太素」の  
校正と訓釈を実質的に兼ねているのである。森立之の「靈樞攷注」は惜しむらくはす  
でに亡佚したが、「素問攷注」と「靈樞攷注」とは実は「太素」を全面的に校勘訓釈した  
著作でもある。< 錢超塵「素問攷注解説」 >

実際に「素問攷注」には、「古經には往々にして」「古訓では」という書き方が多々  
現れます。この場合の古經とは、さきにも言った「太素」や「甲乙經」といふことにな  
り、まさに漢唐の時代に生れた医書です。

今日は少々こみいった話になって恐縮ですが、森立之の書いたこのような注釈を読んで  
みようと思います。

### ※林羅山(1583～1657)の思想と江戸時代の身分制度

『春鑑抄』においては、宇宙の原理である理は、人間関係では身分として現れ  
るとして上下定分の理を説いて士農工商の身分制度を正当化した。これは、  
幕藩体制の根幹をなす身分秩序絶対化の理論であった。羅山は、同書で、国を

よく治めるためには「序」(秩序・序列)を保つため、「敬」(つしみがむか  
ない心)と、その具体的な現れである「礼」(礼儀・法度)が重要視されるべき  
ことを説き、持敬(心のなかに「敬」を持ち続けること)を強調している(存  
心持敬)。羅山は、宇宙の原理である理をきわめれば、内には敬、外には礼として  
現れると説き、敬と礼が人倫の基本であり、理と心の一体化を説いたのである  
(居敬窮理)。

### 傷寒論・平脈法 第二 (森立之「傷寒論攷注」)

○案、説文無評字、古以平為評量評事字、平脈亦為評量之義。真本「玉篇」  
評、皮柄反。「字書」評、訂也。

●案ずるに、『説文解字』に「評」字なし。古は「平」を以て「評量」「評事」  
の字と為す。「平脈」も亦た「評量」の義と為す。真本「玉篇」には「評、皮柄  
の反」とあり。「字書」には、「評」は「訂」也。

### 靈樞・熱病 第二十三 (澁江抽齋「靈樞講義」)

○熱病已得汗出而脈尚躁、喘、且復熱、勿刺膚。

●熱病して已に汗出づるを得、脈、尚お躁、喘ぎ、且つ復熱するは、

膚を刺すこと勿れ。

○大素「勿刺膚」作「勿庸刺」

●大素は「膚を刺すこと勿れ」を「刺を庸ること勿れ」に作る。

素問・瘧論第三十五 (森立之「素問攷注」)

○瘧脈滿大急、刺背俞、用五腧俞背俞各一、適行至於血也。

●瘧して(病んで)脈の滿、大、急なるは、背俞を刺せ。五を用い、腧

俞、背俞を各一、行い(治療)に適えば血に至る也。

○案據太素、則「胝俞各一」四字爲「背俞」二字注脚也。

此一條太素有之。新校正於後文云「詳從前瘧脈滿大至此、全元起本在第四卷中、

王氏移續於此也」

據此、則此條全本亦載可知也。然則古來此條重複在此、但其文小異。前云中鍼、

此云第五鍼、前云傍五腧俞、此云胝俞、前云適肥瘦出其血、此云適行至於血也。

其文義互相發、不可輒刪去也。如此文例甚多、文中自相爲經傳也。

●案ずるに、『太素』に據れば則ち「胝俞各一」の四字は「背俞」二字の注脚と

爲すなり。

此の一條、『太素』に有り。『新校正』は後文に云う「詳らかにすれば、前の『瘧

脈滿大』より此れに至るは、『全元起本』の第四卷中に在り。王氏『素問攷注』

の撰者である王冰、唐、此れに移續したる也」

此れに據れば則ち、此の條、全(元起)本も亦た載すると知る可き也。然れば則ち、

古來此の條、重複して此れに在り。但し其の文、小しく異なれり。前に云う「中

鍼」は、此れに云う「第五鍼」なり※、前に云う「傍五腧俞」は、此れに云う「胝

俞」なり、前に云う「肥瘦に適えば其の血を出せ」は、此れに云う「行に適え

ば血に至る」也。其の文義、互いに相い發すれば、輒ち刪去すべからざる也。

此の如き文例甚だ多く、文中自ら經傳を相い爲す也。

※靈樞・九鍼十二原篇によれば、鍼には九種あつて、それは以下の通りとなる。

- ① 鑱鍼、② 員鍼、③ 鍤鍼、④ 鋒鍼、⑤ 鈹鍼、⑥ 員利鍼、

- ⑦ 毫鍼、⑧ 長鍼、⑨ 大鍼

この内の「中鍼」とは、⑤鈹鍼といふことになる。



| 時 代     | 素問の存亡と注釈書   |  |
|---------|---|--|
| 漢       | 戦国時代～漢代までの医論集として、素問と靈枢の中心的部分が完成された。   |  |
| 三国      | <p>難經(素問の難解な部分の解説として書かれたとされる)</p> <p>ぜんげんき ぜんげんき<br/>全元起本素問(全元起による訓解や篇順の整理)</p> <p>こうおつきょう こうほひつ<br/>甲乙經(無名子により書かれ、7世紀に三国時代の文人皇甫謐の名に託された)</p>   |  |
| 唐       | <p>たいそ ようじょうぜん<br/>「太素」楊上善</p> <p>おうひょう<br/>王冰次注本素問</p>   |  |
| 北宋      | <p>りんおく しんこうせい<br/>林億らによる新校正素問</p> <p>(校正医書局により、三度校定本が出された)</p> <p>しんぎょう<br/>針經(のちに「靈枢」と呼ばれる)についても、本格的に校正が試みられたが、宋朝の所蔵していた針經は、欠落・欠本の多い零細な「針經」一巻というものであった。</p>   |  |
| 南宋      | <p>北宋が金に滅ぼされ、首都に保存されていた素問の版木も持ち去られた。そのため、南宋では北宋の二度目の校定本を復刻して紹興本素問を刊行した。</p> <p>しんぎょう<br/>針經は南宋時代、有力な民間医である史崧(しすう)の上申により、皇帝の侍医・王繼先の主導で素問とともに合刻、公刊された。『重広補註黄帝内經素問靈枢』[重広…二書の合刻の意] &lt;紹興本、現「靈枢」の祖本&gt;</p> |  |
| 明       | <p>→顧從徳による覆刻版素問</p> <p>馬元台「素問靈枢注證發微」<br/>張介賓「類經」<br/>吳昆「黄帝内經素問吳注」</p>   |  |
| 清       | <p>高世拭「素問直解」</p>  |  |
| 日本・江戸時代 | <p>○京都仁和寺で太素が再発見される(尾張医学館・浅井正封が筆写)</p> <p>多紀元簡「素問識」「靈枢識」<br/>多紀元堅「素問紹識」<br/>森立之「素問攷注」「靈枢攷注」(亡佚)<br/>澁江抽齊「靈枢講義」</p>  |  |